

1. 建造物修理（けんぞうぶつしゅうり）

選定年月日：昭和 51 年 5 月 4 日

保存団体名：（公財）文化財建造物保存技術協会

概要：

我が国における文化財建造物の保存修理は 120 年以上の伝統をもち、現在まで約 2,200 棟の建造物が根本修理を受けている。これらの建造物は 7 世紀から 20 世紀初頭まで約 1300 年にわたる各時代の遺構で、その種別は社寺、城郭、住宅、墓碑、橋梁^{きょうりょう}等あらゆる分野にわたっており、構造も木造、石造、煉瓦造^{れんが ぞう}等多岐にわたり、また地域差や工匠の系統による差異もある。したがってその保存修理に当たる技術者には高度な専門知識に基づく技術が要求され、この修理技術は文化財建造物の保存には不可欠のものである。



建造物修理中堅研修の様子

2. 建造物木工（けんぞうぶつもっこう）

選定年月日：昭和51年5月4日

保存団体名：（公財）文化財建造物保存技術協会，NPO 法人日本伝統建築
技術保存会

概要：

我が国の建造物は近年まで木造がその主流であり，したがって建築技術は木工技術によって代表され，それは世界に類例稀^{まれ}なほど精巧な成果を示すものである。しかし，近年では，材料，工具等の変化や，いわゆる近代建築の隆盛に伴って，古式の木工技術を体得する者は少なく，しだいに技術水準が低下しつつある。特に文化財建造物の保存修理に当たっては，各時代の木工技術の正確な踏襲，再現が求められるところから，現在数少ない木工技能者が体得している古式の木工技術を伝承し，錬磨してその水準を確保する必要がある。



古式の木工技術による修理の様子

3. 檜皮葺・柿葺（ひわだぶき・こけらぶき）

選定年月日：昭和51年5月4日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

檜皮^{ひわだぶき}及び柿^{こけらぶき}葺の技術は、建造物の屋根^{ぶき}技術として我が国特有のものである。この技術の発祥は詳^{つまび}らかでないが、檜皮葺は8世紀の中ごろに既に用いられており、柿葺は古く発生した板^{いたぶき}葺を源流とし、中世の末にはその技法が定着し大成したとみられている。現在、多数の檜皮葺・柿葺の建造物が、重要文化財として保護されており、これらの建造物を保存するためには檜皮葺・柿葺の技術は欠くことのできないものである。しかるに、指定文化財以外では若干の社寺建築にその需要があるとはいえ、一般建築界では全く用いられない技術であって、このため、伝承は困難となりつつある。



檜皮採取の様子



檜皮葺の様子



柿葺の様子

4. 茅葺（かやぶき）

選定年月日：昭和55年4月21日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

茅葺^{かやぶき}は、我が国では草葺^{くさぶき}の一種として古くから建造物の種類と地域を問わず広範囲に使用され、農・山村の民家では、今なお若干ながらそれを見ることができる。しかし、一般には茅場制度の消滅と原野の開発によって良質の茅^{かやて}が得られなくなり、「茅手」と呼ばれた葺師^{ふきし}も年とともに減少し、現在では兼業としてわずかにその技術を伝えているにすぎず、それも高齢化して、一般の需要がない今日では、専業として成り立たないことから後継者を育成することも困難となっている。

茅葺は、古代に行われたと考えられる「元吊り^{もとづり}」の工法から次第に改良されて近世には既に現在みられる工法になっていたと思われるが、なお地域的には幾つかの技法の差がみられ、それが茅葺の地方色として伝統的に残されている。

現在重要文化財として保存されている茅葺の建造物を維持し、後世に伝えるためには茅葺の技術は欠くことができない重要な技術である。



茅葺の技術

5. 建造物装飾（けんぞうぶつそうしょく）

選定年月日：平成19年9月6日

保存団体名：（一社）社寺建造物美術保存技術協会

概要：

文化財建造物を装飾する技術には、^{うるしぬり}漆塗、^{さいしき}彩色、^{かざり}鏝金具製作、^{いもの}鋳物製作、鍛冶技術などがある。特に仏教伝来とともに様々な技術が伝わって、古代仏堂が華麗に彩られ、やがて寺院以外の建造物にも盛んに用いられるようになった。

これらの技術は、建造物を装うという意匠性だけでなく、部材表面の風化抑制などの機能性も担っている。建造物の修理においては、その両者を考慮して適切な技法を吟味して施工する必要があり、そのためには豊富な知見と熟練が求められる。

また建造物の保存修理を適切な周期で行うためには、これらの技術の円滑な継承が必要となるが、一般建築における需要が少ないために、継続的かつ効果的な技術伝承が困難となっている。



鏝金具技術研修の様子

6. 建造物彩色（けんぞうぶつさいしき）

選定年月日：昭和54年4月21日

保存団体名：（公財）日光社寺文化財保存会

概要：

我が国における建造物彩色は、仏教の伝来とともに大陸から移入されたと考えられ、平安時代になると大陸直伝の技法から日本的なものとして洗練され、華麗な発達を遂げた。中世では仏塔の内部等にその伝統が受け継がれ、中期からは、素木造を基本とした神社建築にも取り入れられ、特に室町末、桃山時代には漆を加えて建物内外ともに豪華絢爛^{けんらん}な彩色を施す技法が発達した。

近代では、油性塗料や合成染料が建築彩色の主流となり、また、天然顔料の資源不足や技術者の減少などもあって、文化財の保存修理以外に古式の建造物彩色は行われていないのが現状である。

このように特殊な技術である反面、文化財の保存には不可欠な技術である。



彩色の様子

7. 建造物漆塗（けんぞうぶつうるしぬり）

選定年月日：平成28年9月30日

保存団体名：（公財）日光社寺文化財保存会

概要：

独特の色艶を持つ漆塗は、^{うるしぬり}彩色・^{さいしき}鍔金具^{かざり}とともに我が国の建造物を^{しょうごん}荘厳する技術として欠かせないものである。漆塗の技法は、部材となる木地を固めた後、ひび割れ防止や補強を施し、下地材を塗っては研ぎ出すという工程を何度も繰り返して下地を平滑にした後、精製した中塗漆^{なかぬりうるし}、上塗漆^{うわぬりうるし}によって仕上げる。保存修理においては、旧塗膜^{とまく}の劣化を見極め、破損した塗層^{とそう}までを掻き落^かとし、必要な工程からなる塗りを施す。使用する工具、漆の調合法や塗り技法は、それぞれの工程で異なり、専門的知識や経験とともに熟達した技術が要求される。

建造物漆塗の技術は、社寺など伝統的な建造物の保存に不可欠であるが、近代以降、油性塗料や合成塗料が建築塗装の主流となり、技能者の減少が危惧されている。



漆塗の様子

8. 屋根瓦葺（本瓦葺）（やねがわらぶき（ほんがわらぶき））

選定年月日：平成6年6月27日

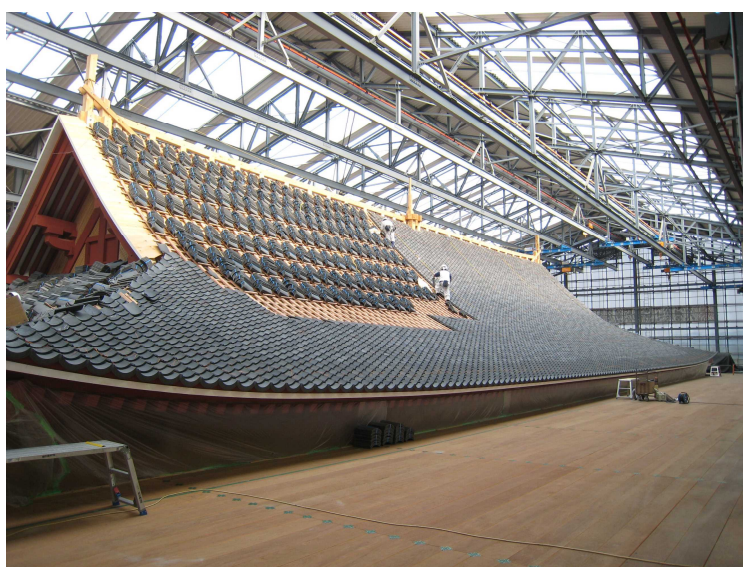
保存団体名：（一社）日本伝統瓦技術保存会

概要：

寺院建築や城郭建築をはじめとする我が国の伝統的な建造物には
ほんがわらぶき
本瓦葺が多く用いられている。

本瓦葺の技術は、再用可能な古瓦をどこまで使用できるかを判別し、新しい瓦との調和のとれた使い方、棟や谷部の雨や強風に対する対策を考え、軒のそ反りや屋根の優美な曲線を伝統的技術でふ葺き上げるためには、高度な判断と技能が要求されることから、文化財建造物の保存修理工事において最も重要な技術の一つである。しかし、一般の建築において本瓦葺の需要が少なくなったことから、この技能を高度に体得した技能者は次第に減少しつつあることから、本瓦葺技術の保存を図り技術の伝承と後継者の育成を図る必要がある。

本瓦葺の技術は、本瓦葺の文化財建造物の保存修理には欠くことのできない技術の一つであるが、これを高度に体得している者は少ない。



本瓦葺の様子

9. 左官（日本壁）（さかん（にほんかべ））

選定年月日：平成14年7月8日

保存団体名：全国文化財壁技術保存会

概要：

左官の職名は近世初期には見られ、それ以前には「泥工」「壁塗り」とも称された。我が国の伝統的左官技術には、表面を土で仕上げる古式京壁と、漆喰^{しっくい}仕上げとする漆喰壁があり、日本壁と総称される。

良質の日本壁を製作するためには、各種素材の吟味から施工まで高度な熟練が必要であり、文化財建造物修理においては、製作された壁の強度や美観が修理工事の良否に大きく影響する。しかし、日本壁製作のような湿式工法には十分な工期と熟練が必要であるため、近年の一般建築においては乾式工法が主流となっている。また湿式工法についても、モルタル下地の上に合成樹脂系資材で仕上げる工法などが一般化していることから、良質な日本壁を製作できる技術者が激減している。



壁研修の様子（大津壁実技）

10. 建具製作（たてぐせいさく）

選定年月日：平成11年6月21日

保存団体名：（一財）全国伝統建具技術保存会

概要：

建具の製作は木取り、矯正、削^{けずり}加工、寸法決め、仕口加工^{しぐち}、仕上加工^{しあげ}、組立^{くみだて}の順で行われる。小片の部材を複数組み合わせで作られ、大工仕事とは異なり、一厘、二厘をゆるがせにできず、また、隠れるところがほとんどないため仕事に逃げ場がなく、わずかな狂いやキズも許されず、極めて細かい神経と高度な技術、それに豊富な経験が必要である。近年の一般建築界では、建具を修理して使用することがほとんどなく、古い形式をもつ建具を作ることも少なくなり、高度な技術を体得した者も希少で、伝統的な技術が失われつつある。



建具研修の様子

1 1. 畳製作（たたみせいさく）

選定年月日：平成16年9月2日

保存団体名：文化財畳保存会

概要：

畳は、貴族邸宅である寝殿造建築^{しんでんづくり}での座具や寝具、寝台の上敷^{うわしき}として使用され、後に、室内周囲に「追い回し」に敷かれたり、室内全体に敷き詰められるようになった。やがて室町時代ころには書院造建築^{しょいんづくり}の発展とともに畳を敷き詰める習慣が広まり、近世以降、一般住宅にも徐々に浸透した。

畳は、稲藁^{いなわら}を交互に積み重ねて麻糸で縫い締めた畳床^{たたみどこ}に、い草を編んだ畳表^{たたみおもて}を張り、両側に畳縁^{もんべり}を縫い付けて仕上げる。

畳製作技術は、多様な規模や形状の部屋を正確に採寸して、規格外の畳を加工し、特殊な紋縁を畳相互の紋合わせに注意して縫い付け、敷き込む技術で、その一連の工程には高度な熟練を要する。しかし近年の一般建築では、軽量化のため新建材等を使用した畳床が普及し、また紋合わせの必要な紋縁が使用されることも少なくなり、伝統的な畳製作技術を有する技能者が激減している。



畳製作の様子

12. 装飾修理技術（そうこうしゅうりぎじゅつ）

選定年月日：平成7年5月31日

保存団体名：（一社）国宝修理装飾師連盟

概要：

我が国では絵画、書跡、古文書などの文化財が、千数百年から数百年の永い年月を経て、今日に伝わっている。特に我が国特有の高温多湿の気象条件の下では、湿気、カビによる腐食や虫害による損傷が起こりやすく、必ずしも恵まれた環境とはいえない。こうした中で、多くの文化財が今日に伝えられたのは文化財を大切にした先人たちの努力に負うところが少なくないが、優れて伝統的な保存修理技術：装飾の技によるところが大きかった。この点は世界的にも類例稀なこととして、特に近年は関係方面を始め各国においても注目されているところである。

我が国伝来の書画類は四季の温湿度変化の影響を受けやすい紙や絹を主材料とするものが多いため、原状のままに伝来するものは稀で、いずれも本紙を紙、糊によって補強した卷子、掛幅、屏風、折帖などの様々な表具の形態に仕立てられて伝わっている。換言すれば、これら文化財は紙、糊による裏打によってのみ本体の保存が図られているといっても過言ではない。それゆえ、こうした脆弱な文化財を後世に維持、保存していくためには、50年から100年を周期として、本紙を支える裏打紙の打替が必要となっている。これらの修理は、表具の解体、解装から旧裏打紙の除去、繕い、裏打替から表具仕立てへの工程を要するもので、各形態の文化財が容易に解体され、新たな生命によって甦ることが常に可能な状態にあるべきことが要求されるのである。この修理に当たっては、当然のこととして伝統的な技術に裏付けられた卓越した装飾の技が必要不可欠となっている。



障壁画取り外し作業

13. 日本産漆生産・精製（にほんさんうるしせいさん・せいせい）

選定年月日：昭和51年5月4日

保存団体名：日本文化財漆協会，日本うるし掻き技術保存会

概要：

日本産漆は透明度，接着力，堅牢度等に優れており，漆芸の制作や漆工品等の保存修理に不可欠の原材料である。漆生産に関する技術には，漆樹の植栽及びその保育・管理，成長した原木からの漆液の採取（漆掻き）等がある。なかでも，掻き鎌や掻き篋などを用いて，樹幹につけた傷から滲み出る生漆を採取する技術（漆掻き技術）は重要なものであり，漆樹を傷めず良質な漆を多く採取するには高度な技量が要求され，長年の経験を積んだ専門の技術者（漆掻き職人）によって行われているが，近年，技術者の減少及び高齢化が急速に進んでいる。



漆掻き研修の様子

1 4. 縁付金箔製造（えんつけきんぱくせいぞう）

選定年月日：平成26年10月23日

保存団体名：金沢金箔伝統技術保存会

概要：

縁付金箔製造は、箔打ち専用の手漉和紙を加工した箔打紙に金を挟んで打ち延ばし、金箔を製造する技法である。

正方形に仕上げた箔を箔合紙に重ねた時、箔合紙の寸法が金箔を縁取るように一回り大きいことから、完成した箔のほか、その製法も縁付と呼ばれる。

縁付金箔製造の技術内容は、澄工程、箔工程、紙仕込み工程の3つに大別される。澄工程は、純金に微量の銀と銅を加えた合金を打ち延ばし、厚さ1,000分の1ミリメートルの澄を仕上げる工程である。箔工程は、澄と箔打紙を交互に重ねて薄く打ち延ばし、厚さ10,000分の1ミリメートルの箔を製造する工程である。紙仕込み工程とは、専用の特殊な手漉和紙を澄又は箔の打紙として仕立てる工程である。澄打紙の仕込みは、ニゴ（稲藁の芯部）を主原料とする手漉和紙を用い、湿らせて機械を叩く工程を繰り返すものである。箔打紙の仕込みは、泥土が添加された箔打ち専用の手漉きの雁皮紙を原紙（下地紙と呼ばれる）とし、湿らせた下地紙を機械で繰り返し叩いた後、稲藁の灰の灰汁に柿渋等を染み込ませて叩くことを繰り返す工程で、この工程が箔の仕上がり大きく影響する。

縁付金箔は極めて薄く、しなやかで大きく、色艶に優れ、無形文化財の工芸技術による作品製作や有形文化財の保存修理には欠くことのできない原材料である。



紙仕込み工程



箔工程